

子どもと教師と協力して

——平和と愛と幸福の世界を——

谷 口 緑

一九五八年は人類にとって画期的な年であったと言われている。人工衛星の打上げによって待望の宇宙旅行への道は開かれ、これからの時代はまさに宇宙時代であると言います。一九五九年は更に画期的な科学の進歩が我々の前にくり拡げられ驚嘆の声をあげさせるかも知りません。このような新時代に科学教育の重要性が叫ばれることは当然のことです。幼児教育の分野でも、いかにして幼い子どもたちを科学的に育てるか、幼児の科学教育はいかにあるべきか、が論議の的となり研究の対象となっています。けれども、人間の作った科学が果してその作った人間の幸福のために全面的に働いてくれるでしょうか？ 宇宙時代の現出も手離しでは喜べない不安から私たちは逃れられない有様です。科学を人間の幸福のために！ そのためにどうすればよいか？ それは科学者だけに任せられない。また、ただ目を見張ってばかりではいけない。それこそ教育者が考えねばならない問題だと思

います。人類始まって以来の新しい時代に生きるのは誰か？ その新時代の推進力となるのは誰か？ それは現代の子どもたちであり、その時代に向かって子どもたちを送り出すのは教師です。教育の仕事も根本的に考えねばならない時だと思えます。私たちは科学教育はいかにあるべきかに並んで、否それよりも先に、その科学を人間の幸福のために役立てることのできる人間を育てることを考えねばならないと思うのです。科学教育と同時に温い人間愛を育てる教育が大切です。

科学教育と並ぶ時代の花形道徳教育も、この意味で新しい時代の新しい人間を作るものとして考えねばならないと思えます。この時代にふさわしい人間の良心、人間の善意、真の人間性を育てることこそもっともっと考えられねばなりません。これこそ教育に真剣に取り組み、子どもたちを愛する教師がいくら考えても考え過ぎることのない問題ではないでしょうか。

このような教育の正道を行くために教師の任務の第一は何よりも子どもを正しく理解すること、教えることより以上に子どもを理解し、認め、受け入れ、味方になることだと思えます。愛とは相手と一つになり、ともに憂いともに喜ぶこと、すなわち協同だと言います。

では、幼い子どもたちはどのように生活し学習し成長していくでしょうか。ゴリーキイは「遊びは子どもたちがこの世界をかえていかねばならぬ使命を持っている、その世界を子どもとして知る方法である。」と言っていますが、子どもはあのかくことない日々の遊びの中で、お互い人間同志の社会でどのように行動すればよいかを覚え、独立した人間としての人格を形作っていくのです。勇気や思いやり、温かさや困難に打ちかつ方法も遊びの中で身につけていきます。ピアジェの実験によっても、自己中心的な子どもが三、四才の頃からその遊びの生活を通して少しずつ社会性が芽生え、實際経験の間に育って、十才以後に相互尊敬の社会的な生活態度がほぼ形を整えることが明らかにされています。自己中心的な生活態度から社会性へぐんぐん真っ直ぐにのびていくのではなく、周囲の条件によって曲げられたり変えられたり後戻りしたりしながら成長していくのです。その大切な時期の歩みでできるだけ真っ直ぐに支障なく進むように傍から協力するのは誰でしょう。限りなく子どもを愛する幼児教育者です。私自身この実

験を身近かに試みることによって子どもたちが遊びを通して行動の型を身につけ、モラルを体得していく姿を見えています。

社会関係について白紙に近い子どもたちを新しい時代にふさわしい人間愛に満ちた人格として育てていくために彼らと遊びの生活をともにし、同じ人間であって一歩先を歩む協同者として生きる。これがおとなの子どもに対する正しい態度であり、子どもたちの幸福を願う教師の在り方だと思うのです。

このような意味で「子どもと教師の協力」ということは、私はそれは教育の本来の姿であると思います。子どもたちに最も近いおとなである親や教師は、彼らが自ら経験し学習し成長するのを見守り、よい人格形成のために彼らの最も必要なものを知ってそれを調える。また未熟さからくる困難を調節してやることによってその成長に協力する。それは次の時代に生きる子どもたちを送り出す子どもの最も尊い価値あるしごとです。何人も求めてやまない平和と幸福の世界にしっかりとつながっているものであり、しかも日々の遊びの中で、いたるところで展開されている遊びの中でおこなわれている、それは「生活指導」の姿です。

幼児教育のすべては生活指導である、とさえ言われていることを考え、私は「子どもと教師と協力して」ということばに続けて「平和と愛と幸福の世界を生み出そう」と皆様に向かって呼びかけたいと思います。(和歌山信愛女子短期大学)